

エストニアを 舞台とする小説

★ソフィ・オクサネンの『粛清』★

国際的なベストセラー

エストニアを舞台にした小説で世界的に売れたのは、この『粛清』がおそらく最初ではないだろうか。フィンランド人の女性作家のソフィ・オクサネン（1977年生れ）が2008年にフィンランド語で書いた作品で、フィンランド国内やヨーロッパ各国のいくつもの文学賞を受賞している。2012年2月に、日本語訳『粛清』が出たので読みやすくなった。

もともと、フィンランドの国立劇場のために書いた戯曲（2007年1月初演）がはじまりで、翌年、小説に書き換えられて Puhdas（粛清）というタイトルで出版された。舞台公演は、同年にタリンのエストニア劇場でも行われ、反響を巻き起こした。その後2010年には小説の英語訳（Purge）が出て評判になり、2011年2月には、ニューヨークの劇場で舞台になったほか、2011年8月には、エストニアのラジオで放送劇になった（*注）。

どんな話？

この作品については、いろんな読み方があって、絶賛する人

清 肅



ソフィ・オクサネン『清肅』のエストニア語訳（左、Jan Kaus 訳、Varrak 出版社）と日本語訳（上野元美訳、早川書房）の表紙。エストニア語訳の表紙は、フィンランド語原書の普及版と同じデザインである。

もいれば、貶す人もいる。内容については、日本のアマゾン書店のサイトには「激動の歴史に翻弄された二人の女の邂逅を描く」という日本語訳の出版元の解説がそのまま引用されているが、私の読後感ではストーリーは少し違う。

時代は、ソ連邦が崩壊してエストニアが独立を回復する1991年から翌年。この小説の主人公の女性アリーデ・トルー（Aide Tru 邦訳ではアリーダ・トゥルー）は、1930年代の後半が思春期だったので、年齢は70歳前後と思われる。共産党の地区支部に勤務していた夫マルティンと数年前に死別し、フィンランド人と結婚した娘が家を出ていったあと、西エストニアの農村で一人暮らしをしている。主人公のアリーデは、生まれてからこの地を離れたことがなく、今住んでいる家も、親の住んでいた家という設定だ。

アリーデの姉インケルとその娘リンダは、1949年、シベリアに連行され、以後の消息はわからない。アリーデは、姉の夫ハンスに片思いをして、二人を引き離すのに成功したものの、ハンスは最後まで彼女になびかず、1951年、家族が不幸な運命に見舞われた背景に義妹が関わっていたことを知らないまま、失意のうちに死ぬ。インケルとリンダが、エストニアに帰ることができないように画策したのもアリーデだった。

ソ連邦は1991年に崩壊する。ある朝、自宅の庭に、若い娘が倒れているのをアリーデが発見する。名前をザーラといい、ウラジオストク生まれだが、エストニア語をロシア語訛りで話す。ザーラはアリーデの姉インケルの孫であることがわかる。祖母からエストニアの話聞いていたザーラは、祖父ハンスやアリーデがどんな運命を生きてきたのか、聞き出そうとする。アリーデは、この娘は姉

から仕返しとして送り込まれたのではないか、という疑いにとらわれる。

故郷のウラジオストクを出たザーラは、最初ベルリンの売春宿で働かされるが、ロシア人のひものパーシャと、その手下のKGB崩れのラブレッチに連れられて、タリンの売春宿に移る。彼女は、あの晩、客を殺してタリンから逃げ出す。タリンからヒッチハイクで南西方向へ逃げ延びたザーラは、

ラーネマー（Kärdla「西の国」）、すなわちラーネ県の最初の町リストイにたどり着き、そこから先は徒歩で南へ向かい、10キロほど歩いて、悲劇の姫の伝説のある古城で有名なコルベレという村落に到着する。このあたりはラーネ県の東の外れの県境で、アリーデの住む家のある場所もそのあたりという設定だ。

翌朝、アリーデの住む家の庭で倒れているのを発見されたザーラは、そのままその家にとどまる。この家を舞台にしてアリーデとザーラのやりとりが展開するのはほんの数日にすぎないが、アリーデの過去とザーラの生い立ちが、二人の出逢いの背景として細切れに交互に挿入されて、長い物語のように感じられる。その間、追手のロシア人二

人組がこの家を突きとめる。しかし、アリーデは男たちにザーラがいることを明かさず、逆に二人を銃で撃ち殺してしまう。

小説の背景となった時代

小説の中に出てくるリステイ駅は、廃線になった鉄道の駅だが、1941年6月と1949年3月の集団強制連行の起点となった駅の一つとして有名で、今でも駅舎の建物が残っている。1999年には、強制連行の犠牲者追悼の記念碑が建てられた。物語の舞台が、この駅にほど近いコルベレ近辺に設定されたのは、偶然ではないだろう。

ソビエト時代を生き延びて1992年を迎えた主人公アリーデは、ザーラの突然の出現によって、自分の過去と正面から向き合わされる。物語は、時系列で展開するのではなく、アリーデの過去やザーラの生い立ちが、回想の形で挿入されて、章ごとに、1990年代の現在とスターリン時代の1950年代の間で行ったり来たりを繰り返す構成になっている。ザーラがアリーデの家の庭に現れるまでの経緯は、物語の後半になるまで全貌が明かされない。

オクサネンのこの小説は、まず北欧で話題になり、フランス語訳が比較的早くから出たが、国際的な知名度が一気に高まるのは、2010年に英訳が出てからである。2009年にエストニア語訳が出ていたエストニアでも、この作品の評価をめぐる論争が再燃した。

1940年代のシベリア連行や、1950年代のソビエト社会が描かれているこの小説を、歴史小説とみなす評論が国際的に多かったし、その読み方はエストニア人の読者にも影響を与えた。ソビエ

ト時代のエストニア社会を正確に描いていないだけでなく、売春宿の記述などは、旧ソ連のエストニアについて非常に否定的なイメージをあたえる作品だとして、断罪した女性文学評論家もいたくらいである。来日したことのある詩人ヤーン・カプリンスキ (Jaani Kaplinski) も批判的なコメントをホームページに載せている。

一方では、この小説は、アリーデの歪んだ愛や、20世紀社会の女性に対する暴力性などを描いた作品として読むべきで、ソビエト体制を健気に生き延びたエストニア民族を描いた歴史小説であるとか、スターリン時代に行われた社会悪を告発する社会派小説であるかのように読むのは的外れだとする考え方もある。私もこの読み方のほうがいいと思った一人である。

小説には、スターリン時代の歴史的出来事や人間関係がモデルになっている描写が多いことは疑いようがないけれど、歴史小説ではない以上、現実の歴史とのずれを時代考証的に指摘することによって、作品そのものの理解にとって本質的な視点が得られるとは考えにくい。エストニア人の知識人たちは、この小説に描かれた「ソビエト時代のエストニア」を、自分が体験した近過去に重ねあわせてしまうから、歴史的事実とのずれを強く意識してしまうのではないだろうか。もし、中世のタリンを舞台とする話だったら、ふつうの読者は誰も時代考証的な詮索はせずに物語として読むはずである。

時代考証にあまりこだわるのはよくないと言っても、物語の舞台のセットになっているエストニア人の日常生活に特有な事物、あるいはソビエト時代に特有だった事物については、ある程度の知識があったほうがいい部分もある。

たとえば、日本ではサウナは北欧のものだと言っても、スウェーデンやノルウェーではなくて、

フィンランド、カレリア、エストニアなどの地域が元祖だから、エストニアにも当然サウナがある。フィンランド語の原文や英語訳で sauna となっている箇所が、日本語訳で「サウナ」「サウナ小屋」ではなく「蒸し風呂」「蒸し風呂小屋」となっているのは、あまり感心できない。

現在のエストニアでは、警察は poliisid と呼ばれているが、ソビエト時代には militsa と呼ばれた組織が警察に相当した。フィンランド語の原文では miisi、英語訳では militia と呼ばれる組織がこの作品に登場する。これを、日本語訳は「義勇軍」と訳している。英語の militia は「義勇軍」「民兵」などと訳されることが多いのだが、ソビエト社会の文脈では「民警」と訳するのが標準的だと思うが、「民警」なら、予備知識のない読者でも、警察に当たる組織だと見当がつくはずだ。

日本語訳には「青年開拓団」という組織が出てくるが、英語訳は Young Pioneers、フィンランド語原文は pioneeri である。少しソビエト社会の知識のある人には、「ピオネール」のことだとびんとくる。ピオネールは、男女一緒の組織である点と、共産主義イデオロギー教育と結びついている点が違うが、英米のスカウト運動をモデルにした少年少女組織である（余談だが、戦時中の日本では「満蒙開拓青少年義勇軍」と称して、15歳から18歳の少年たちが中国大陆に送り込まれたらしい）。20世紀後半のソビエト社会に「義勇軍」「開拓団」はそぐわない。

小説の結末

ザーラの祖父ハンス・ペックは、終戦直後の一時期は森に逃げ込んでゲリラ組織「森の同胞」に参加し反体制活動を行うが、逃げ切れなくなる。そこで、妻のインケルと諮ってアリーデは、ハンスが殺されたこととして共産党支部に届けを出し、そのあと、家の隠し部屋に密かに匿う。その後、インケルが強制連行されると、共産党支部に務めるマルティンと結婚したアリーデがこの家に引越してくる。ハンスは、そのまま2〜3年、マルティンには知られることなく、同じ隠し部屋に隠れすむが、やがて心身ともに疲れ果てて死ぬ。小説の最後になって、ハンスの遺体が40年もその隠し部屋の地下に置かれていたらしいことがわかる。ロシア人の追手の男たちを殺して、ザーラを無事に逃したアリーデは、先祖伝来の土地は私が守ったから、いつでも帰ることができるという内容の手紙を姉宛てに書き、家中に灯油を撒いたあと、ハンスのそばに横たわって火を放つ。なお、英訳や日本語訳では、アリーデがガソリンを撒いたとされているが、フィンランド語原文では灯油になっている。

贖罪にはならないだろうから、天国には行けないかもしれないが、アリーデ流の始末のつけかたである。

（松村一登）

* 2012年5月にオペラがヘルシンキで上演され、2012年9月には、エストニアとベルリンでロケをしたフィンランド制作の映画が封切られた。